

# トランプ大統領当選の背景と これからの農業問題

## 『農業経営者』読者の会セミナー

講師：浅川芳裕氏  
(ジャーナリスト)

▶2016年12月2日  
(東京都)

ドナルド・トランプが米国第45代大統領に当選したのを「青天の霹靂」ととらえる見方が多い中、本誌元副編集長の浅川芳裕氏は、その当選を共和党の予備選時にすでに確信していた。メディアや「識者」が大がかりな世論調査や分析力を駆使しても予想できなかったトランプの当選を、浅川氏はなぜ見抜くことができたのか。そして大統領に就任した後、トランプは何をしようとしているのか。

2016年12月2日に開催された浅川氏によるセミナーは、こうした疑問に答えるとともに、トランプについて一般にいわれているイメージをくつがえすものでもあった。

トランプはその過激な発言から「暴言王」と呼ばれ、政治家としての資質を疑問視する声はいまだに多い。しかし、浅川氏は開口一番、トランプは「知性のかたまり」だった。

「知性と暴言とは反対に聞こえるかもしれないが、本来の知性とは、人間の感情をすくいあげたり、ゆさぶったり、抽象化したり、ビジュアル化したりして、人を動かすことができる力」だと浅川氏はいう。そうした人心を掌握するトランプの能力については浅川氏の著書『ドナルド・トランプ 黒の説得術』（東京堂出

版）をぜひお読みいただきたい。

### メディアは神が創造した もっとも不誠実な存在

浅川氏とは逆に、どうしてメディアはトランプ当選を予想できなかったのか。その理由を一言でいえば、方法論があつたかないか。浅川氏にいわせれば、日本のメディアは米国メディアの劣化コピーにすぎない。その米国メディアにしても中立な存在ではない。

メディアは、自分たちの偏見や先入観や願望を候補者に投影し、その数値を引っ張り出して権威づける。そこに事実に基づいた分析は存在しない。だから、今回のように自分たちの予想が実際の選挙結果とちがった場合、論理的な説明ができない。こうしたメディアの本質を見抜いていたトランプは「メディアは神が創造したもっとも不誠実な存在である」と述べているほどだ。そうやってほとんどのメディアを敵に回しながらも、トランプは勝利した。

では、浅川氏はどのようにしてトランプ勝利を確信したのか。彼はまず仮説を立てた。それは「現在の多くの米国人の潜在意識では、オバマ政治の存続阻止を願っているのではないか」というものだった。その検

証にあたって注目したのは、候補者自身の発言と、それに対する有権者の反応である。候補者の発言とは、ホームページやSNS、演説や討論会など。有権者の反応とは、同じくSNSやブログなどである。

じつは選挙結果の決定要因は候補者と有権者のやりとりだけだ。あとは、メディアもふくめて副次的なものに過ぎず、選挙の影響因子にはなっても決定因子にはなりえない。日本の報道は米国の選挙へ与える影響はゼロなので、見る意味は全くない。予備選の結果や候補者の発言や有権者の反応については現地に行かずともネットで見られる。共和党予備選の結果を見ると、共和党に入れた候補者が数百万人単位で多かった。本選でこれをくつがえす変動要因がなければ、トランプが勝つものと思われた。

浅川氏は現地取材を行なっているが、その期間は1週間に満たない。決定因子にかかわる取材が必要なのは激戦州だけであり、影響因子についてはシンクタンクへの取材をすればよい。メディアはシンクタンクをチェックしているし、候補者の政策の原案をつくるのもシンクタンクからだ。これだけでトランプの勝利と、だいたいの最終獲得票数までわかったという。とてもシンプルであ

る。しかし、メディアも「識者」もこのシンプルな手続きをすら怠っていたというわけだ。

## 貴族主義への違和感が トランプ勝利の鍵

今回の選挙は、クリントンかトランプかというよりも、オバマ体制の存続か阻止かが鍵だった、と浅川氏はいう。クリントンは基本的にオバマ政治の存続をめざしていた。しかし、それに否と唱える米国人が大幅に増加した。

オバマ政治の本質は社会主義革命にある。あらゆる生活の細部に政府が介入し、規制を増やし、政府にたよる人間を増やす。金融業界から多額の献金を受けとる一方、債務は増大し、生活保護費は倍増し、農務省をはじめ役所は肥大化した。移民は増え、そこに投じられる予算はかさ



講演中の浅川氏

む一方で、米国本来の独立自尊の精神で生きていた人たちの生活は締め付けられてきた。それがオバマ政権下の米国の現実の一面だった。

オバマ政権が国民よりも政府を重んじる方向性をとってきたのに対して、トランプは、国民を政府よりも重んじると主張した。また、オバマ政権下ではけっして口になできなかった移民問題を正面から取りあげ、過激な物言いとその問題点を指摘することで、多くの米国人の賛意を得た。トランプは米国に一番重きを置いた上でのチェンジを志向する。

個人的に興味深かったのは、レディ・ガガやハリウッドの俳優などのセレブや有名人の多くがクリントンを支持し、トランプを嫌悪する発言をしていたことについての浅川氏のコメントだった。

浅川氏によれば、オバマ・クリントンがレディ・ガガのような有名人をひきつけるのはそこに貴族主義があるからだという。貴族は困っている人たちにはやさしい。そうした貴族主義のシンボルとして有名人やセレブを位置づける。それが民主党のやり方だった。

しかし、封建社会がないにもかかわらず貴族的な特権階級が固定化しはじめたことに対して違和感や気持ち悪さをもつ人たちも少なくない。

トランプを支持したのはそうした人たちだった。それは一般にいわれていたような教育のない貧困層ではなく、むしろ中間層以上の勤労者たちであった。

トランプも富裕層であるが、彼が志向するのは貴族主義ではない。アメリカンドリームとは、本来、階級や地位にかかわらず、だれにでも成功のチャンスがあるという前提の上で成り立つものであり、貴族的な階級社会の固定化とは真逆なのだ。

## トランプのツイッターは 米国版『学問のすすめ』

トランプの政治的立場は、取引条件の同一化を重視する自由貿易派である。一方、民主党政権の外交スタンスのベースは表向き「相手国の立場に立つこと」であるが、実際にはグローバルな癒着や縁故主義がある。これは日本が進めてきた保護貿易とも相性がいい。

農業にしても、一見保護しているように見えて、実際には癒着を生みだす構造がつくられてきた。いわば、トランプは癒着や利権を守るために複雑化してしまったシステムを一扫して、「勤労者の保護」や「法の支配の維持」などを進めていくというわけだ。

浅川氏は、トランプのツイッター

は米国版の『学問のすすめ』のようなものだという。福澤諭吉が説いたように、トランプもまた、お上に仕えるのが当たり前と考えている国民を、独立自尊の民にもどすためのわかりやすいメッセージを発し続けている、という。

浅川氏の解説から、そうしたトランプの現実的な理念は見えてくる。その一方で人種間対立や、移民や他者に対する差別がさらに進むことについての懸念は感じた。現にトランプの当選以後、移民や宗教的マイノリティへの差別に市民権が与えられたと早合点した者たちによる事件も各地で起きている。また、先日、トランプは温暖化対策の目標を定めたパリ協定からの離脱を示唆する発言もあつた。

トランプはまず国内を立て直すことをめざすだろう。それがうまくいって国民の満足度が上がれば、「国際の」と呼ばれる他者の問題にも目が向くゆとりが生まれ、そちらもおのずと解決していくということなのかもしれない。

これまでは、その優先順位が逆だった。行きすぎたグローバリズムから身を引いて、ローカリズムの上に成立するグローバリズムをめざそうという意味では、しごく真つ当な立場なのかもしれない。(田中真知)